

活動



Seibo

Feeding the Future

報告書

Activity Report 2025

特定非営利活動法人聖母

2025年（1月~12月）





活動報告書 2025 Contents

感謝のメッセージ

団体概要

- せいぼ
- MobellとKrizevac

2025年のマラウイ

- 活動概要
- マラウイチーム
- 活動ハイライト
- 学校、コミュニティとの連携
- 日本との懸け橋

2025年の日本

- 活動概要
- コーヒー事業
- 日本チーム
- 教育事業
- 関東地区
- 関西地区
- 万博・ナショナルデー
- マラウイ渡航
- 表彰実績・掲載記事
- 最後に

編集方針

活動報告書2025は、該当年度内における、せいぼじゃぱん、せいぼマリアの活動を各ステークホルダーの皆様へ、より深く理解していただくことを目的としています。

また、法人名等は敬称略とさせていただきます。ご了承ください。

＜対象期間＞2025年1月1日~12月31日

感謝のメッセージ

せいぼじゃぱん
理事長・代表
山田真人



2025年、一年間を通してせいぼじゃぱんはマラウイにおいて多くのスタッフとの協働によって学校給食支援活動を通して多くの子どもたちの未来につながる活動をしてきました。

せいぼは2025年を通して、日本とマラウイの架け橋となる一年となりました。

来年度のせいぼじゃぱんの目標としては、マラウイで学校給食を届けるためのせいぼ・マリアの全活動をカバーし、現地スタッフと共に昨年の資金調達モデルより持続可能な仕組みを構築したいと考えています。

私たちは、これらの目標を達成するために、せいぼじゃぱん内部のガバナンス上の課題を克服し、より生産性の高いチームを構築するとともに、せいぼ・マリアとの連携を強化し、データベースに関する情報を交換することで、潜在的な寄付者との共有を図ってまいります。

2025年以降、せいぼ・マリアは20,600人の子どもたちに合計3,358,613食の給食を提供することができました。また、給食配布の年次データベースを統合し、クラウドで管理すること、全国の人々への提供ができるようになりました。学校へ調理用鍋・コンロ43基、バケツ、調理師用防護服を配備し、安全衛生を向上させました。

また、2026年に向けては、児童福祉に焦点を当て、早朝に学校給食の提供の実施、厨房の建設、教室棟の建設、そして最も重要な飲用・給食調理用安全水の提供を推進します。

そして、これらの目標達成に向けて、複数の資金調達キャンペーンと戦略的パートナーシップを通じた資源動員の強化を目指します。

せいぼマリア
プログラスマネージャー
ビクター・ムトゥロ





団体概要



せいぼについて



「せいぼ」は、日本を拠点に活動を行うNPO法人 聖母（せいぼじゃぱん）と、マラウイを拠点に活動を行うせいぼマリアの2団体の総称です。2団体がパートナー団体として協力体制をとりながら、日々活動を行っています。

せいぼとは

「お腹を減らしているすべての子どもに給食を！」

私たちはアフリカ・マラウイで学校給食支援を行う非営利団体です。マラウイ北部・南部の小学校、幼稚園、CBCC（地域主体の子どもセンター）で日々子どもたちに学校給食を提供しています。また日本では、学校給食支援のためのファンレイジング活動を主としつつ、日本でのチャリティ文化の拡大、国際支援の輪を広げていくために学校や企業と提携しながら日々活動を行っています。私たちは学校給食支援を通して、子どもたちの栄養状態改善、また学校に通うきっかけを創り出し、子どもたち、そして社会のより良い未来を目指しています。

理念

ビジョン：子どもが自分の力を発揮する社会の実現

ミッション：

- ・ 学校給食支援を通じて、飢餓のない世界を実現する
- ・ 貧困課題を通して、国際課題の発信をする
- ・ 日本の人々と協働しチャリティ文化を広げる
- ・ 企業、学校などの組織と価値観を共有し、協働する



沿革

- 2015：せいぼマリア設立
せいぼじゃぱん設立
- 2018：寄付型コーヒーブランド
「Warm Hearts Coffee Club」運営開始
- 2020：教育機関との提携開始
チャリティやソーシャルビジネスが学べる
オンラインコースをリリース
- 2022：公益財団法人社会貢献財団より
社会貢献者表彰受賞
- 2024：一般社団法人ソーシャルプロダクツ普及推進協会より
ソーシャル・プロダクツ賞を受賞。
- 2025：関西大阪万博公式通訳としてマラウイ館で勤務



詳しくはウェブサイトを
ご覧ください
www.seibojapan.or.jp/



MobellとKrizevac Project



日本やイギリスで事業を展開するイギリスの通信事業会社であるMobell Communications Ltd.の出資するチャリティ団体、Krizevac Projectによってせいぼの活動は開始されました。そして現在でもせいぼマリアは一部、Krizevac Projectの支援によって運営が行われています。

*英国政府公認 チャリティ登録番号 No: 1115608



詳しくはウェブサイトをご覧ください
www.krizevac.org

Krizevac Project

Krizevac Projectはマラウイを中心に、ナイジェリア、ルワンダなどの地域で様々な活動を行っています。その活動は多岐に渡り、主に雇用創出、質の高い教育の提供、現地のキリスト教的価値観に基づいたコミュニティ作りなどがあり、せいぼの活動はそれらの活動の一角に当たります。雇用創出については、様々なソーシャルビジネスを現地で立ち上げるとともに、IT教育などを含む職業訓練施設の設立・運営などを行い、地域の雇用創出及び経済活性化の一端を担っています。



マラウイ全国の企業・団体に
重機レンタルビジネスを行う“Torrent”
マラウイで最初に立ち上げたビジネス



南部ブランタイヤ地区・チロモニに位置する
教育キャンパス
“Mary Queen of Peace Catholic Institute”

またKrizevac Projectは質の高い教育の提供にも力を入れています。

その代表例として、南部ブランタイヤ地区チロモニに位置する大規模な教育キャンパス、“Mary Queen of Peace Catholic Institute”の設立・運営があります。この教育キャンパスは幼稚園である“Mother Teresa Catholic Nursery School”、小学校の“St. Kizito Catholic Primary School”、高校の“Carlo Acutis Catholic High School”、そして大学の“St. John Paul II Leadership & IT College”の、幼稚園から大学までが一つのキャンパスに同居する施設です。現在合計約1,000人の子どもが在籍しており、その中でもせいぼは幼稚園と小学校の子どもたちに対して学校給食を提供しています。また、せいぼの南部事務所も同キャンパスに位置しています。



2025年のマラウイ



活動概要

活動ハイライト

支援給食数



約**340万**食

支援児童数



約**2万**人

支援学校数



55校

2025年、せいぼは小学校、幼稚園、CBCCを含む55の学校において約2万人の子どもたちに学校給食を提供してきました。この1年間、せいぼマリアのチームは、各学校のボランティアスタッフや先生方と協力し、そしてせいぼじゃぱんからの支援を受け、年間合計3,358,613食の学校給食を提供することができました。

学校給食の提供を通じて、就学者数（登録児童数）は1月の18,568人から10月には20,623人へと増加し、出席者数も1月の18,022人から5月には18,768人へと増加させることができました。



プログラムの詳細と内訳



図1：2025年の給食提供総数

上の図1は、マラウイのムジンバ地区およびブランタイヤ地区において、せいぼマリアが提供した学校給食の総数を示しています。ただし、8月の全期間および9月の大半は学校が休暇期間であったため、グラフでは8月を除外し、9月の数値は低くなっています。

それ以外の期間については、年間を通じて一貫して高い水準で給食を提供できており、特に10月には単月で40万食以上というピークに達しました。月ごとの緩やかな変動は、主に出席者数の増減によるものと考えられます。このことから、給食支援プログラムを成功させるためには、安定した出席を確保することが重要であると認識しています。

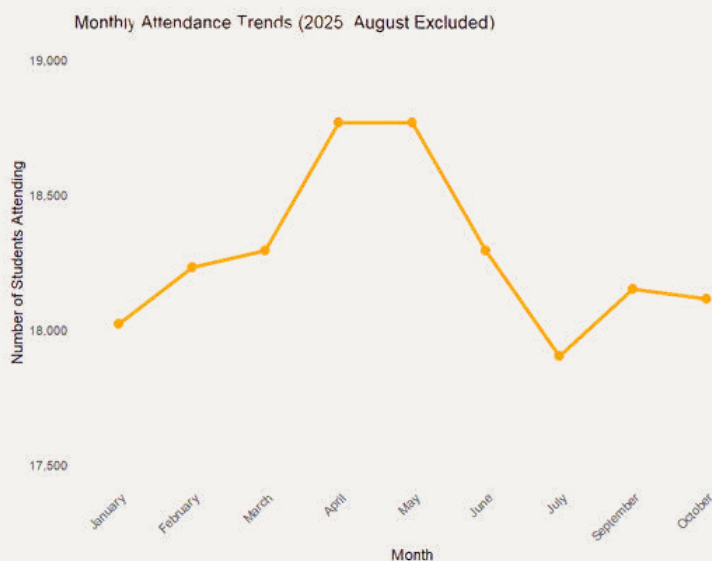


図2：2025年の月別出席者数の推移（8月を除く）

図2は、2025年のマラウイにおける月別出席者数の推移を示しています。休暇によるデータの歪みを避けるため、この図でも8月は除外しています。また、主要な学期中の出席者数の変動を分かりやすくするため、Y軸（縦軸）の目盛りを調整しています。

4月から5月にかけて出席者数が顕著に増加していることが見て取れます。これは、雨季の終わりと同時に、給食提供数が増加していると考えられます。私たちの学校給食は、子どもたちにとって学校へ通う動機となり、また保護者にとっても「子どもが栄養のある食事をとれている」という安心感につながるものとして機能し続けています。

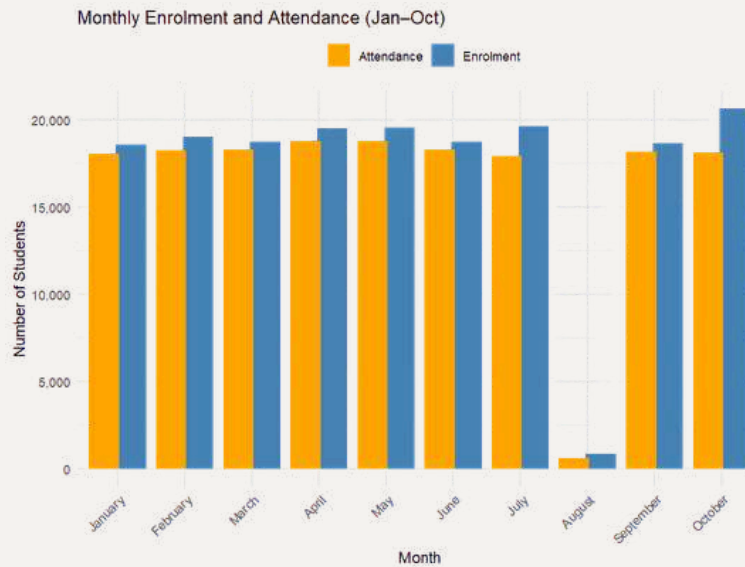


図3：月別登録者数と出席者数の推移（1月～10月）

登録者数（就学者数）と出席者数の数値も同様に良好な結果を示しています。今年は出席者数、登録者数ともに高い水準を維持し、10月には登録者数が2万人を超えました。

さらに、1~10月の10か月のうち8か月において、登録者の90%以上という高い出席率を維持しました。その8か月のうち6か月では、少なくとも96%に達しています。出席率は、子どもたちに包括的な教育を提供する上で極めて重要であり、学校給食プログラムの成功を示す信頼できる指標でもあります。

したがって、学校給食プログラムの影響には2つの側面があります。

1. 就学児童数（登録者数）の増加
2. 登録児童の出席率の向上

教育とともに栄養のある食事が提供されることを知っているため、子どもたちは学校へ行くことを楽しみにし、保護者も喜んで子どもたちを送り出しています。

2024年との比較

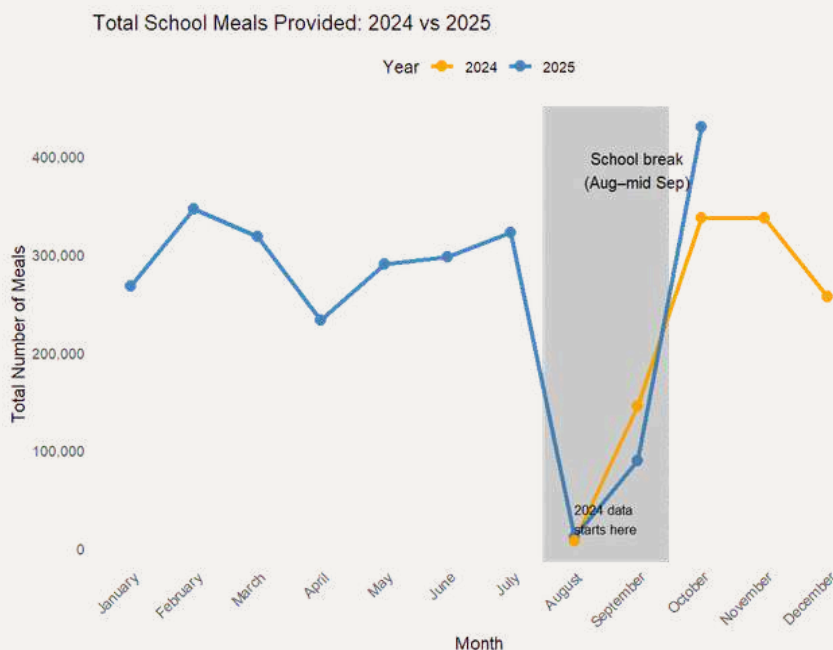


図4：給食提供総数の比較（2024年, 2025年）

図4は、2025年に提供された給食総数（図1と同様）に、2024年の数値をオレンジ色で追加して比較したものです。

このグラフは、学校給食が一貫して高い水準で提供されていること、そして前年度から改善していることを示しています。10月は給食提供数において最も成功した月となりました。これは、せいぼマリアの全スタッフの献身的な働き、せいぼじゃんによる資金調達活動、そして寄付者の皆様のおかげで実現しました。私たちの活動は確かな影響をもたらしており、2026年もこの良い傾向を継続していきたいと考えています。

マラウイチーム

概要

Seibo Mariaは現在、合計8名のスタッフによって運営されています。北部のムジンバに5名、南部のブランタイヤに3名が配置されています。プログラスマネージャーの指導のもと、財務・管理担当、学校給食担当、広報担当が協力し、団体の活動を進めています。

スタッフの主な業務

- 給食原料の発注・配送手配
- 学校への給食調理・保管方法等の指導
- データの収集
- 予算策定、資金管理、計画策定
- 写真や映像の記録
- 地域や教育関係者との連携



新規スタッフ

Rodgers Mhango

役職:給食支援管理者
地区:ムジンバ
採用時期:8月

「学校給食担当として働くことは、多くの子どもたちや地域社会の未来に意味のある変化をもたらせる貴重な役割です。子どもたちが給食を通して学ぶ機会を得られることに関われるのは本当にやりがいがあり、彼らの心に残る経験になると思っています。その一員でいられることが幸せです。」



Mwai Leman

学校給食管理者



学校給食支援活動に携わっているMwaiさんは2017年からせいぼで活動しています。ボランティアを含む数地区で活動を行っており、私立学校やCBCCと連携しています。学校の先生、ボランティアたち、地域のスタッフ、政府機関などとの協働により、子どもたちが安全で栄養豊富な給食を食べ、健康に学校生活を送ることができています。

このプログラムの重要な業務内容として、正確なモニタリングとデータの収集が挙げられます。出席記録と給食データはすべての学校において定期的に確認され、各学校のニーズに合った給食の供給が確保されるよう管理されています。

衛生管理、調理方法、提供される給食の安全基準は、全学校における品質管理を確保するため、定期的に監視されています。

今年は、ムジンバにある12の小学校、ボランティアの1つの小学校を含む54の学校において学校給食支援プログラムを実施し、約2万人の子どもたちに学校給食を提供しました。学校給食は登校日には毎日、通常午前9時から10時の間に提供されており、現地調達の食材が使用されています。この日々の食事は、子どもたちの健康と活力を維持し、学習に向かう力を支える上で極めて重要な役割を果たしています。

最も脆弱な立場にある子どもたちへの支援は、依然として本プログラムの最優先事項です。CBCCでは、「せいぼキッズ (Seibo child)」と呼ばれる、特に高いリスクを抱えた子どもが少なくとも1名在籍していることを条件に、給食が無償で提供されています。

支援対象となる子どもたちは、ボランティアや地元の教会が協力し、家庭訪問を行って生活状況を確認するなど、地域主導のプロセスを経て特定されます。収集された情報は、最も支援を必要とする子どもたちに確実に援助が届くよう慎重に審査され、認定されたせいぼキッズにはプログラムを通じて定期的に食事が提供されます。

学校給食支援プロジェクトの拡大は、子どもたちの出席率と学習環境に明確なプラスの影響をもたらしています。2017年以降、支援対象となる児童数は約7,000名から20,000名近くにまで増加しました。

各学校からは、出席率の改善に加え、児童の学習意欲の向上や、授業へのより積極的な参加が見られるとの報告が寄せられています。多くの家庭にとって、日々の給食提供は食糧不足に対する不安や負担を軽減し、子どもたちが継続して学校に通うための大きな支えとなっています。



せいぼは、持続的な教育成果を上げるためには、栄養支援だけでは不十分であると認識しています。そのため、教師や学校長、地域の方々と緊密に連携し、学習環境全体の支援に取り組んでいます。

2020年および2021年に実施した教員研修は、授業の質の向上に貢献しており、当時研修を受けた教員の約60%が現在もプログラムに携わっています。定期的な給食提供とこうした教育支援を組み合わせることで、子どもたちの学習意欲や授業への参加率は推定80%向上するという成果につながっています。

コミュニティの参画は、学校給食プログラムの成功にとって不可欠な基盤です。保護者、教師、ボランティア、学校運営委員会、そして村のリーダーたちが、食事の準備やモニタリング、子どもたちのサポート活動に積極的に参加しています。このように責任を分かち合うことで、地域主体の運営（オーナーシップ）が育まれ、それぞれのコミュニティ固有のニーズに寄り添ったプログラム運営が可能となります。

こうした成功の一方で、プログラムは依然として課題にも直面しています。ボランティアや教師の参加状況のばらつきや、輸送やモニタリングに関する物理的な制約などが挙げられます。

今後に向けて、せいぼはステークホルダーとの定期会議を通じた連携強化、ボランティア基盤の拡大、年次教員研修の再開、そして支援・モニタリング体制の改善を目指します。地域社会やパートナーとの継続的な協力を通じて、学校給食プログラムはこれからも、子どもたちの栄養、教育、そして健やかな成長（ウェルビーイング）を支える重要な基盤であり続けます。

活動ハイライト

私たちが届ける一杯の温かいお粥。それは単なる食事ではありません。子どもたちの健康を守り、学ぶ意欲を引き出し、そして家族やコミュニティの未来を支える希望の一杯です。この資料では、2025年前半の活動から生まれた感動的な瞬間と、具体的な成果をご紹介します。



「学校に来るのが楽しみ。お粥が食べられるから、
元気になって勉強できるの！」
(1月・カプータ小学校の少女)

給食は、子どもたちの心と体に大きな変化をもたらしています。

学びへの意欲向上：

下の写真の双子は、2021年6月に生まれました。彼らは2026年に卒園予定です。以前、双子は栄養失調に苦しんでいましたが、幸いにも素晴らしい回復を遂げ、今では健康状態が良好です。二人は2023年10月にせいぼによって支援を受けるようになりました。

その時点で彼らは2歳4ヶ月でした。この支援が、彼らの発展に非常に良い影響を与えました。支援を受ける前は、あまり授業に参加することができませんでした。今では大きな進展を見せています。彼らは、数字を数えることや、詩を暗唱したり、単語を覚えたり、色を認識することができるようになりました。その学業の進歩は、彼らが受けた支援の証です。

また、彼らの健康状態も劇的に改善され、今では元気で健康な状態に見えます。以前の状態とは大きな違いです。



健康と衛生習慣の定着： 栄養豊富な給食により、子どもたちの健康状態は目に見えて改善しています。また、おかゆが配られる前に、児童たちはプログラムから提供されたバケツと石けんを使って手を洗い、自分のカップを洗います。このシンプルながらも大切な習慣は、今では彼らの学校生活に深く根付いています。



自信と社会性の育成： 給食の時間は、友達と笑い合い、協力と思いやりの心を育む大切な時間です。内気だった子どもが、給食を通じて仲間との絆を深め、笑顔を見せるようになりました。



子どもたちは給食の時間を心待ちにし、みんなで一緒に食事を楽しんでいます。ある子は「こうやってお粥を食べるんだよ！」と言いながら、楽しそうにスプーンの使い方を見せてくれ、周りの子どもたちにも笑顔が広がりました。給食の時間は、子どもたちの友情や協調性を育む、かけがえのないひとときとなっています。

地域コミュニティへの影響



Story 1 - 3歳の三つ子たち

2022年3月22日に生まれた三つ子たちをご紹介します。母親は、子どもたちの世話をしながら、市場での販売や手仕事で生計を立てるなど、非常に忙しい生活を送っていました。しかし、三つ子がせいぼにより支援されることになり、母親は安堵の息をつくことができました。これにより、子どもたちの世話をする負担が軽減され、彼女はビジネスに集中することができ、より効果的に子どもたちを支援することが可能となりました。

Story 2 - Fatihu Deen（ファティフ・ディーン）幼稚園に通う女の子

彼女は2022年2月16日に生まれ、2027年12月に卒業予定です。内気で静かな性格で、友達とほとんど交流することはありませんでした。母親が学校に彼女を預けるとき、しばしば不安になっていました。しかし、学校に通い始めてから、大きな進展を見せています。彼女はますます積極的になり、友達との遊びにも定期的に参加するようになりました。



Story 3 - Holy Cross（ホーリークロス）幼稚園に通う女の子

この写真の女の子は、2021年12月23日に生まれました。彼女は2023年8月からせいぼによって支援を受け、Holy Cross（ホーリークロス）幼稚園に通い始めました。

彼女が入園する前、母親は仕事の確保に非常に困難を感じていました。多くの雇用主が、彼女が幼い子どもを世話しなければならないことや、衛生面に懸念があることを理由に仕事を提供しませんでした。しかし、今では学校に通うようになったことで、母親は建設作業員として働くことができるようになりました。この結果、彼女は職人の手伝いをし、安定した収入を得て、子どもたちを支えることができます。

Story 4 - 生徒たちへの制服の配布

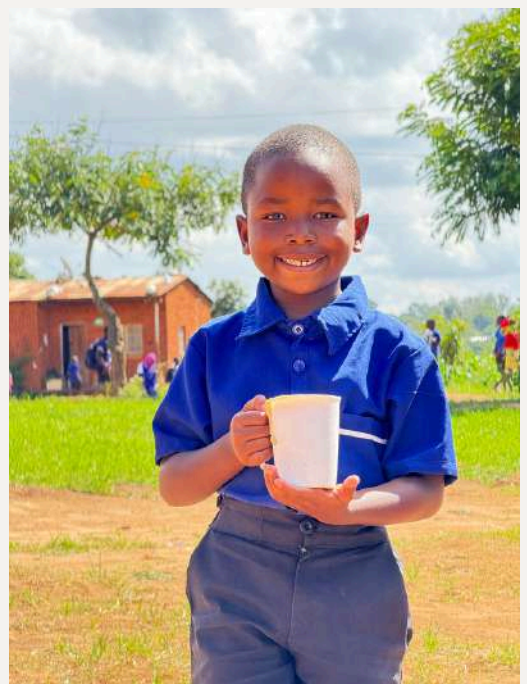
不規則な内職による収入では、必需品である制服を子どもたちに買い与えることも難しかったため、双子の母親は今回の寄付に心から感謝していました。これで肩の荷が下りたと、安堵の気持ちでいっぱいの様子でした。

せいぼは、恵まれない家庭も裕福な家庭も等しく力づけることを使命としています。質の高い教育機会を提供し、誰もが公平なスタートラインに立てる環境を育むことで、それを最も必要とする人々に希望を届けています。



Story 5 - 地域が主体の活動へ

給食の調理や配付は、地域のボランティアや学校委員会が主体となって行われています。世代を超えて協力し合うことで、コミュニティの絆は一層強固なものになりました。女性メンバーも積極的に活動に参加し、地域開発に貢献しています。



学校、コミュニティとの連携

ブランタイヤ地区での会議

私たちは、ステークホルダー会議に積極的に参加して下さる学校運営委員会や保護者の方々との連携を継続しています。

これらの会議では、地域社会の参加を促すとともに、子どもたちの出席確保や調理・配膳の補助といった、給食プログラムの実効性と持続可能性を支えるための皆様の役割について再確認を行っています。

私たちは、給食プログラムを成功させるためには保護者の皆様の協力が不可欠であると認識しており、今後も地域の方々との対話と連携を続けてまいります。



Cilingani CBCC での会議の様子



Cilingani CBCC での活動の様子

委員会のメンバーは、調理作業を保護者や調理スタッフに任せきりにするのではなく、自らも積極的にに関わり、たとえば井戸から清潔な水を汲むといった活動にも参加しています。こうした取り組みにより、常に安全な水が使用され、衛生基準の維持につながっています。

学校長会議

2月、各校の学校長を集めた会議を開催しました。

会議では、記録簿への適切な記入手順、リクニパーラ調理時における計量基準の統一、そして給食原料の安全な保管方法など、運営上のいくつかの重要な課題について話し合いました。また、学校内でせいぼの備品や食材が盗難に遭った場合など、緊急事態が発生した際の対応手順についても取り決めを行いました。

会議終了後には各校へ調理器具などを配布し、最後に参加者全員で集合写真を撮影して閉会しました。



9周年記念イベント

2月11日、せいぼの9周年を迎え、SNS上で記念の投稿を行いました。本格的な記念式典は2月28日にブランチで開催されました。記念イベントの一環として、Kriver幼稚園で給食調理実演を行い、せいぼのスタッフ、理事、近隣の学校の校長が参加し、せいぼの理事が子どもたちに給食を提供する特別な機会となりました。食事の後、理事の Dhlelisile Phiri 氏がケーキカットのセレモニーを行い、子どもたちは楽しそうに「ハッピーバースデー」の歌を歌いました。参加者全員でケーキを分け合い、忘れられないひとときを過ごしました。



記念ケーキ



ケーキカット後の子どもたちの様子



給食の準備をするせいぼの理事とプログラムマネージャー

選考会議

2024年2月以来中断していた選考会議が2025年に再開されました。Mary Queen of peaceの会議室で開催されたこれらの会議では、申請書に記載された情報を確認するため、家庭訪問が実施されます。委員会は家庭訪問での所見を考慮し、一つ一つの申請を審査・検討します。そして、最も支援を必要とする子どもたちへの支援提供を決定します。この活動は支援対象者、特に日々の食事などといった生活必需品の確保にも苦勞している人々にとっての希望です。委員会のメンバーは、子どもたちが自ら選んだわけではない恵まれない家庭環境にあることを考慮し、誰を無料保育教育の対象とするかを決定するという、極めて重要な役割を担っています。

このプロセスは、最も困窮している人々への支援における透明性、説明責任、そして公平性を保証するものであり、意義あるインパクトをもたらすという当団体の使命にも合致しています。



日本との架け橋

日本政府との連携

在マラウイ日本大使館主催の天皇誕生日祝賀会に参加し、活動を紹介しました。また、大使館関係者が学校を視察し、調理施設建設のための支援を検討してくださるなど、日本政府との連携も進んでいます。

天皇誕生日祝賀会（在マラウイ日本大使館）

2025年2月20日、せいぼマリアは在マラウイ日本大使館の招待を受け、リロングウェのBICCで開催された日本国天皇誕生日祝賀会に参加しました。せいぼマリアを代表して、Victor、Future、Mwaiの3名が出席しました。このイベントは、政府関係者、企業パートナー、外交関係者とのネットワーキングの貴重な機会となりました。



日本大使館からの訪問

5月20日、日本大使館から鈴木さんとHugo Mlewaさんが、草の根・人間の安全保障無償資金協力（GGP）の現地確認プロセスの一環として、せいぼのムジンバ事務所を訪問しました。今回の訪問では、マチェレチェタ小学校、チャベレ小学校、カニエレレ小学校の3校における調理施設建設案の評価が目的でした。



日本の若者との心温まる交流

日本の大学生やJICA隊員が現地を訪問し、子どもたちと一緒に粥を食べたり、薪割りを手伝ったりと、心温まる交流が生まれました。こうした訪問は、日本の支援者とマラウイの現場を繋ぐ貴重な機会となっています。

2025年2月、せいぼじゃぱんの活動の中で知り合った大学生のかけるさん、そしてその仲間の皆さんがマラウイ及び周辺国を訪れました。



東京外国語大学の学生で、アフリカ地域専攻の日本人ボランティアである山本さんは、当校の給食プログラムを直接体験するため、4月4日にムジンバに到着しました。4月7日から9日にかけて、コミュニケーション担当者や給食担当者と共に、ムジンバ地区内の9校を訪問しました。

訪問中、山本さんはせいぼのプログラムマネージャー、生徒、教師、学校委員会のメンバー、そしてボランティアとして活躍する調理スタッフなど、さまざまな関係者にインタビューを行い、給食プログラムの日常的な運営、地域の関与、全体的な影響について貴重な洞察を得ました。彼は給食の様子を観察し、生徒たちと交流する中で、このプログラムが出席率や福祉に直接的な恩恵をもたらしていることを実感しました。

4月10日、ミスク（チティバ）へ出発する前に、山本さんは私たちの週次チームミーティングに参加し、彼の訪問について振り返る時間を持った後、心温まるお別れのセッションが行われました。彼の訪問は、せいぼマラウイにとって重要な節目となるとともに、せいぼジャパンとの相互理解と協力関係を強化する一助となりました。



右のQRコードから
レポートもご覧いただけます。



5月初旬、せいぼはサリマ地区病院で保健担当官として活動しているJICAの日本人ボランティア、河本万里子さんをお迎えする機会がありました。保健と栄養の専門的な知識を持つ万里子さんは、せいぼの学校給食プログラムがもたらす栄養面での利点に強い関心を示し、さらに詳しく知るための視察をしました。



調理実演

10月16日、私たちの学校給食管理者は、カブク小学校において、ポリッジ（お粥）調理におけるベストプラクティスを徹底し、標準作業手順書に従うための実践的な調理実演を行いました。

このセッションは、薪の準備、水汲み、鍋の加熱といったゼロの状態から始まり、ボランティアの調理員の方々もすべての工程に熱心に参加しました。これらの研修は、学校給食の質と安全性を高めるだけでなく、地域の調理員の能力向上にもつながり、すべての子どもたちが栄養価の高い、適切に調理されたポリッジを確実に受け取れるようにするものです。



集合写真



調理実演の様子

食器の配布

私たちは、1年生用のカップ、石鹸、そしてボランティア調理員向けの保護具（帽子、エプロン、手袋）といった、プログラムを補完する物品を各学校に配布しました。これは、私たちのプログラムにおける衛生管理、安全性、そして全体的な有効性をサポートするものです。





活動概要



年間寄付額

¥13,334,261



コーヒーの売上額*

¥11,986,445

*上記金額にはコーヒーを除く、
寄付型商品の売り上げも含まれます。

**コーヒーの販売は関連団体である
一般社団法人聖母が運営しています。



2025年
110以上の
イベントに参加

50以上の学校
との提携



概要



2025年、マラウイの子どもたちの学校給食支援に向け、企業・団体・個人・教育機関から多くのご寄付をいただきました。2025年には110回以上のイベントに参加・開催し、コーヒー販売や啓発プレゼンテーション・ワークショップを実施。これらのイベントとプレゼンテーションにおけるコーヒー販売だけで、寄付者の皆様のご厚意により約1200万円を調達しました。この目覚ましい進展を継続し、イベント開催数・寄付金総額・企業支援基盤の拡大を目指します。支援者の皆様の継続的なご支援に深く感謝申し上げます。皆様の寛大なご支援は、計り知れない影響をもたらしています。

15円で1人の子どもに1日分の食事を提供できます。
また、3,000円でその子どもに1年間分の食事を提供できます。

コーヒー事業



コーヒー事業

コーヒーや紅茶などの商品は
こちらよりお求めください
www.charity-coffee.jp



せいぼの運営する寄付型コーヒーブランド、Warm Hearts Coffee Clubの商品購入を通しての寄付を多くいただきました。

定期購入を含むオンライン販売をはじめ、イベントでの販売、教育プログラムの一環として文化祭等のイベント等での販売など、例年より引き続き多くの方々にコーヒーを通じて、マラウイの子どもたちへ寄付をいただきました。

商品概要

私たちのマラウイ産コーヒー事業は2018年より開始しました。当初私たちのミッションに共感していただいたアタカ通商を通して、現在もマラウイから安定的に日本国内にコーヒーが輸入されています。

私たちのコーヒーは購入することによって、マラウイの子どもたちの学校給食につながっているだけでなく、コーヒーの需要を作り出すことによる農家の方々への間接的な支援にもなっています。



また昨年度より、せいぼはマラウイ南部に位置するサテンワ農園より紅茶を輸入しております。

サテンワ農園の紅茶は、フェアトレード認証とレインフォレスト・アライアンス認証を受けており、農園自体も農民の健康や高い質の労働環境、子どもたちの高等教育支援などを行っており、とても社会性の高い商品です。

この紅茶の販売を通して、生産者の生活向上はもちろん、利益のマラウイの子どもたちへの還元を目指しています。



2025年9月より、マラウイ初・国内一貫生産の「Kwanza Cocoa」を日本初輸入しました。女性支援や環境保護に取り組むエシカルなチョコレートです。コーヒーとの相性も良く、購入が現地の子どもたちの給食支援に繋がります。



Staff Focus

学生スタッフ

平野健太郎



Q. ご自身について簡単に教えてください

A. 上智大学国際教養学部4年生の平野健太郎です。幼少期をメキシコと静岡で過ごし、大学では英語で国際経営・経済学を学んでいます。中でも、会計学と開発経済学に関心を持っています。

Q. せいぼに関わり始めたきっかけを教えてください

A. 私がせいぼと初めて関わったのは、高校2年生の時です。当時、せいぼとモベルが共同で提供していた「ソーシャルビジネス」に関するオンラインコースに参加したのがきっかけでした。以前、メキシコに住んでいた際に国内の著しい経済格差を目の当たりにした経験があり、もともと経済格差や経済発展といった社会課題に強い関心を持っていました。そうした背景もあり、高校の先生を通じてこのコースやせいぼの活動を知ることができたのは、私にとって非常に幸運な出会いでした。

Q. せいぼでの役割について教えてください

A. 幸運なことに、私はこれまでせいぼで様々な役割を経験させていただきました。現在は学生生活の終わりが近づいているため、引き継ぎを進めている段階です。業務内容は、月次・年次報告書などの情報公開管理、SNS運用、イベント対応にはじまり、中学・高校での出前授業、ウェブサイト運営、さらには財務管理の補佐まで多岐にわたりました。

私が大学2年生で本格的に関わり始めた頃、学生スタッフやボランティアはまだ少ない状況でした。そこで私は、活動の幅を広げると同時に、学生がNPOでの実務を経験できる場を作りたいと考え、学生チームの構築に力を注ぎました。

ゼロからチームを作ることは簡単ではありませんでした。特に、組織としての規律やルールを整えつつ、メンバー個々の「やりたいこと」を制限しないよう配慮するというバランスには苦心しました。しかし、そのバランスを模索するプロセスこそが、結果として、せいぼでの活動において最も面白く、意義深い経験の一つとなりました。



日本チーム

Staff Focus

学生スタッフ 平野健太郎



Q. せいぼの仕事のやりがいやユニークな点を教えてください

A. せいぼでの活動において最もやりがいがあり、かつユニークだと感じる点は、一人ひとりに高いレベルの裁量権が任されている環境です。

自分の担当領域において自ら考え、主体的に行動することが求められるだけでなく、与えられた役割の枠を超えてアイデアを提案することが歓迎され、新しい挑戦を後押ししてくれます。

私自身、学生という立場ではなかなか経験できないような業務や、組織の意思決定プロセスそのものに深く携わることができました。こうした経験は、私が将来のキャリアを考える上で、非常に重要な土台となっています。

また、多種多様な人々と出会えることも、せいぼで活動する大きな魅力の一つです。団体内では先輩・後輩を問わず多様なメンバーと共に活動できましたし、団体外においても、JICA海外協力隊の方々をはじめ、アフリカに関わる活動をしている多くの方々と出会う機会に恵まれました。その一つひとつの出会いが私の視野を大きく広げてくれ、私にとってかけがえのない財産となっています。

Q. せいぼの活動に興味を持っている方々へメッセージをお願いします

A. 学生のうちから、これほど高い責任感を持ちながら社会課題に深く関わることができる機会は、そう多くはないと思います。せいぼでの経験は、単なる活動の枠を超えて、その後の自分の進路や考え方にまで影響を与え続けるものです。同時に、せいぼは学生だけのものではありません。社会人を含め、様々なバックグラウンドを持つ人々が集える場所でもあります。多様な視点を持つ人々と共に働き、学び合えることは、せいぼの最大の強みの一つです。一人でも多くの方が、この活動に関わってくださればとても嬉しいです。



教育事業

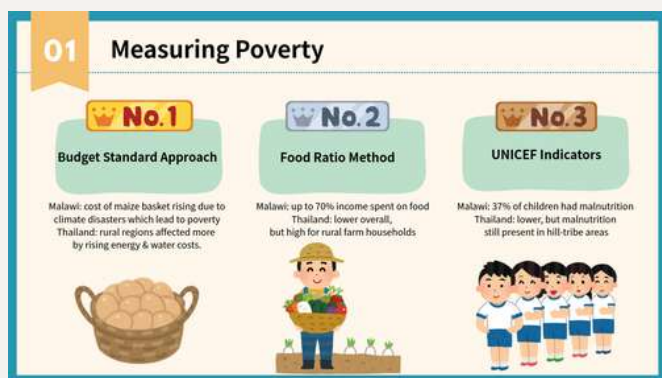
事業概要

せいぼじゃぱんは、教育機関と連携し、対話的な学習や課外活動など、多岐にわたる活動に継続して積極的に取り組んでいます。日本の学生たちとの活動を通じて、彼らが地域や地球規模の課題を主体的に捉えて向き合い、持続可能な社会の実現に向けて自ら行動を起こせるよう促すことを目指しています。

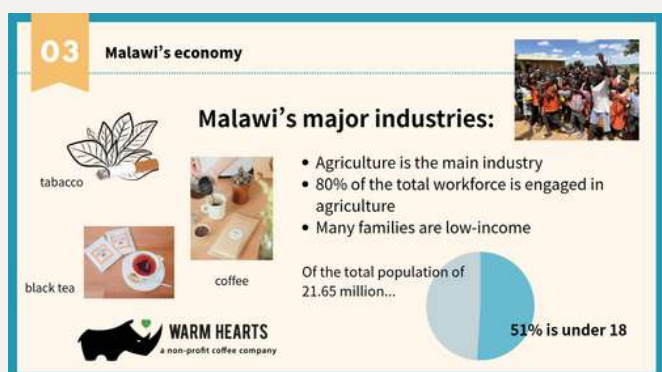
また、せいぼは日本における「チャリティ（寄付）への関心の低さ」という課題にも向き合い続けています。マラウイへの支援活動を支えていくためには、日本国内、とりわけ若い世代の間でチャリティ文化を根付かせることが不可欠です。私たちは活動を通じて、単にマラウイの子どもたちを支援するだけでなく、日本社会において新たな価値観や行動を育むことも目的としています。

せいぼじゃぱんの教育プログラムでは、「クリティカルシンキング（批判的思考）」「共感（エンパシー）」そして「行動（アクション）」を育むことを重要視しています。これらを通じて、学生一人ひとりが地域や世界に変革をもたらす担い手となり、未来の持続可能な社会づくりに貢献できるよう後押ししていきます。

教材の一例



サレジオ中学校での授業風景



関東学院高等学校での生徒たちのプレゼンテーション

2025年8月29日、NPO法人せいぼはカトリック教育学会にて、ラウンドテーブルを実施しました。

学生スタッフ9名と高校生ボランティア2名が、せいぼの概要と学生スタッフの活動内容、活動に参加することになったきっかけと現在の思いを話して頂きました。

その内容に基づいて、参加者は話を聞きたい学生のテーブルに分かれ、以下の内容について話し合いました。

それぞれの学生が高校からせいぼの活動に関わっているメンバーで、深いカトリック精神に基づいた内容を知ることができるものになりました。

最後にはそれぞれのテーブルにて、参加者から今後の活動への応用例が発表されました。具体的な「生きる事例」であるミッションスクールで過ごした大学生が、ラウンドテーブルを実施することで、有意義な機会となりました。

また、翌日の8月30日に、研究発表を行いました。

カトリック学校で育まれる「隣人を大切にする心」や「社会に役立ちたいという思い」。これらの価値観は、実は教室の外で大きな力を発揮します。今回の発表では、NPO法人せいぼの活動を例に、教育現場と社会活動が結びつくことで生まれる学びの意義を紹介しました。特に大学でのキャリア教育との関わりは、学生たちの成長を後押しする大切な機会となっています。

カトリック教育とNPOの協働は、学生に「社会とつながる実感」を与えます。そして、自分の存在や学びがどのように社会に役立つのかを考えるきっかけとなります。NPO法人せいぼの活動事例からは、教育の場で培った価値観が経済や社会活動の中で活かされる可能性が見えてきました。こうした取り組みは、これからのキャリア教育にとっても重要な道しるべとなるでしょう。



ケーススタディ2

アオバジャパン・バイリンガルプリスクール でのワークショップ:「マラウイへの旅」



せいぼは、日本のあらゆる年齢の子どもたちとの関わりを続けており、国際バカロレア初等教育プログラム（PYP）の一環として、異文化理解を深める取り組みを行っています。アオバジャパン・バイリンガルプリスクール（早稲田キャンパス）では、「コミュニティ」をテーマにしたワークショップを開催しました。

ワークショップでは、紙芝居やモニターを使ったプレゼンテーションを通じて、子どもたちはマラウイについて学びました。「マラウイってどこにあるの?」「マラウイの人たちはどんな生活をしているの?」といった質問が飛び交い、子どもたちは異文化や環境の違いに強い関心を示しました。セッションを通じて、「お金がなくてお腹が空いているマラウイの子どもたちを、どうやったら助けてあげられるの?」といった質問も出るなど、活発なやり取りが行われました。

このワークショップには保護者の方々も参加し、温かい雰囲気の中で子どもたちが学ぶ様子を見守っていただきました。子どもたちが難しいテーマに真剣に取り組む、「世界を変えるために何かしたい」という思いを表現する姿は、とても感動的でした。このワークショップは、他者の生活に関心を持ち、より公平な社会の実現に向けて私たちがどう貢献できるかを、若い世代に伝え、教育することの重要性を改めて確認する機会となりました。



関東地区

ケーススタディ1

Ethical Campus 2025

2025年4月26日に東京国際交流館プラザ平成にて開催された、全国の学生団体が集う大規模イベント、ETHICAL CAMPUS 2025にてせいぼの学生チームはブースでのコーヒーの試飲と販売に加え活動紹介を行いました。

また、学生団体として2030年までの5年間を見据えた具体的な『5カ年行動計画』を策定し発表するプレゼンアワードにせいぼの学生チームが予選審査を勝ち抜き、見事出場を果たしました。



ケーススタディ2

日本コーヒー文化学会



せいぼは6月15日、日本コーヒー文化学会にて、マラウイのコーヒーとその流通、市場価値、そして給食支援に繋げて販売をする一般社団法人聖母、NPO法人聖母の活動の仕組みと影響力について、お話をさせて頂きました。

学生チームとの連携も強調し、日本の未来の人材が、どのようにコーヒーの消費文化についても影響を与え、産地の未来にも繋がっていくのかについても、触れることができました。

ケーススタディ3

8月2日・3日の2日間に渡り、TICAD（アフリカ開発会議）のプレイベントとしてJICA横浜で開催された「Sport for Tomorrow X Africa Action Day 2025」に、参加しました。

本イベントには、カメルーン、タンザニア、マラウイ、ケニアをはじめとするアフリカ諸国から、数多くのNPOや社会的企業が集まりました。

当日はせいぼの学生メンバーが主体となって活動し、アフリカに関わる将来の取り組みへとつながる関係を築くとともに、NPO分野におけるビジネス機会や成長の可能性を発信する場となりました。

また、このイベントを通じて、給食約1,200食分に相当する多大なご支援をいただきました。



関西地区

ケーススタディ1

12月6日、せいぼはアムネスティ・インターナショナル日本が主催するイベントに参加しました。このイベントは、12月10日に祝われる世界人権デーに合わせて開催されたものです。

当日は「ライティング・マラソン」という各国の人権侵害に当たる事例や社会課題について書かれた文書や写真を見て、その課題に対する政府の取り組みを訴えるためのレターライティングも実施されていました。

イベントの中で、私たちはせいぼの活動を紹介する時間もいただきました。現地の生産者と連携した学校給食プログラムが、子どもたちを学校へ送り出す母親を支え、結果として女性の権利向上（エンパワーメント）にも貢献している点についてお話ししました。また、マラウイ産コーヒーを振る舞いながら、給食支援の現状などマラウイの現地事情について参加者と語り合い、それらをより広い視点での「人権課題」と結びつけて考える良い機会となりました。

今回はユース・ムーブメント（若者による活動）の要素が強いイベントだったこともあり、多くの高校生や大学生と直接対話することができました。さらに愛知、大阪、兵庫など、様々な地域の方々とも新たなつながりを築くことができました。



EXPO 2025



関西では約10名の学生スタッフが活動しており、2025年大阪・関西万博のマラウイ・パビリオンでも多くのメンバーが運営に携わりました。

パビリオンでは、単にせいぼの活動を紹介するだけでなく、マラウイという国の文化や魅力についても積極的に発信を行いました。多くの来場者がパビリオンに興味を持ち、私たちの話に熱心に耳を傾けてくださいました。その経験を通じて、私たちは「学生自身が主体となって活動している」という事実こそが、人々の関心を惹きつけ、共感を呼ぶための重要なポイントだと改めて実感しました。



教育事業

関西の子ども食堂での学習会



私たちは、日本の小学生にもマラウイの子どもたちの日常やせいぼの活動について知ってもらいたいと考え、イベントを開催しました。

当日に向けて、学生スタッフはどうすれば子どもたちに分かりやすく伝えられるか、準備を重ねてきました。本番では、子どもたちがテーマに興味を持てるような問いかけを行うなどの工夫をしましたが、中には「フェアトレード」などの概念を理解するのが難しい場面も見受けられました。

今回の経験は、私たちにとっても、より伝わりやすい紹介方法や表現について改めて考え直す、非常に良い機会となりました。

コーヒー販売

報徳学園、東遊園地での販売会

コーヒーの販売においては、イベントのテーマに合わせた声かけや、万博への出展実績、そして購入が子どもたちの給食支援につながることをアピールした結果、多くの関心を集め、購入につなげることができました。

その一方で、販売活動を行う中で、単に商品をテーブルに並べるだけでは視覚的にお客様の目を引くことができないという課題にも気づきました。そのため、販売の機会を重ねるごとに、より人目を引く魅力的なディスプレイの方法について学び、改善を図ることができました。



Business Youth Conference

マリストブラザーズインターナショナルスクールでのイベント



マリストブラザーズインターナショナルスクールの高校生たちが、せいぼじゃぱんのコーヒーをどのように販売するかを提案する会議が開催されました。

参加した3つの学校が、それぞれ創意工夫を凝らした独自の販売方法を発表し、私たちにとっても多くの学びがありました。また、私たちからは関西地域での活動について高校生たちに伝えることができ、この交流は次世代へ知識や経験をつないでいくための有意義な取り組みであると実感しました。

万博・マラウイナショナルデー

2025年6月17日から20日の4日間、マラウイ共和国（以下、マラウイ）のヴィトゥンビコ・ムンバ貿易産業大臣（H.E. Eng. Vitumbiko Mumba：以下、ムンバ大臣）が訪日されました。今回の訪日の主な目的は、大阪で開催中の万国博覧会（以下、万博）において、6月18日に行われた「マラウイ・ナショナルデー」への出席でした。ナショナルデーとは、万博の公式参加国に1日ずつ割り当てられる日で、各国の文化や伝統を紹介する催しが行われます。

この期間中、弊団体の学生スタッフである平野健太郎が、リエゾン兼日英通訳としてムンバ大臣に随行し、エスコートやスケジュール確認などの業務を担当しました。

ナショナルデー当日の式典でムンバ大臣は演説を行い、日本との協力関係強化を訴えるとともに、農業、観光、鉱業、製造業といった未活用分野における投資機会を強調しました。式典後にはマラウイ国立舞踊団による伝統舞踊が披露され、その後、駐日マラウイ大使を含む、マラウイと深い関わりを持つ企業、団体、研究者、政府関係者の代表者らとの会食が行われました。



大臣の公式プログラムとは別の会場では、マラウイ投資貿易センター（MITC）のクルーガー局長が、投資および貿易分野におけるマラウイの可能性についてプレゼンテーションを行いました。

このセッションでは、せいぼじゃぱん代表の山田真人が通訳を務めました。

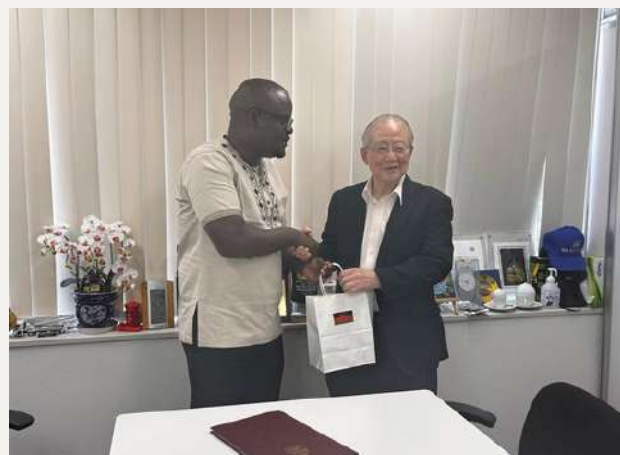
詳しくはこちらのレポートもご確認ください:



翌日、代表団は大阪から東京へ移動し、アタカ通商株式会社を訪問しました。アタカ通商は世界各国のスペシャルティコーヒーを専門とする日本の商社で、せいぼの学校給食支援活動に共感いただき、せいぼの運営するWarm Hearts Coffee Clubにコーヒーを提供していただいております。会談では、マラウイ製品の輸出や日本市場における新たな貿易機会について意見交換が行われました。企業としての具体的な関心や課題が提示され、今後のビジネス協力の可能性について議論がなされました。

その他にも複数の会合が持たれ、UNIDO東京事務所（国際連合工業開発機関 東京投資・技術移転促進事務所）とは、マラウイの投資環境や産業開発の潜在性について議論を行いました。

その後、代表団は国際協力機構（JICA）を訪問し、インフラ整備や農業開発、人材育成といった分野におけるマラウイへの協力の現状と今後の展望について意見が交わされました。教育や農村開発を通じて持続的な経済発展を支える取り組みについても触れられました。最後に、駐日マラウイ大使館を訪問しました。ここでは、大使館職員との打ち合わせを行い、今回の訪日全体を通じての調整や総括的な意見交換が行われました。



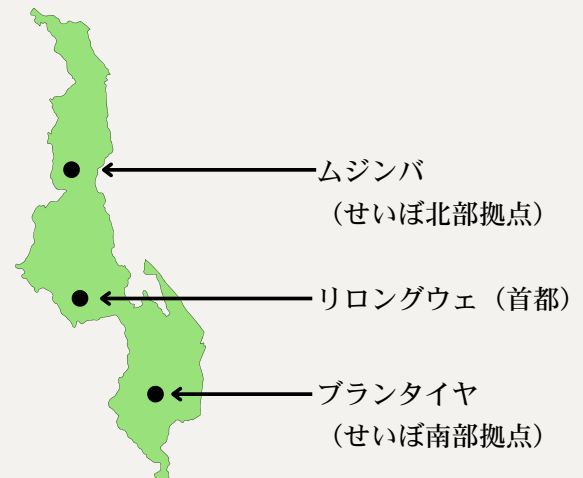
今回の訪日を通じて、ムンバ大臣が繰り返し強調されていたのは「未活用分野（untapped opportunities）に日本の力を」という呼びかけでした。

具体的には農業、観光、鉱業、製造といった分野での協力の可能性が挙げられ、日本の企業や機関がマラウイに進出する余地は大きいと訴えられていました。このメッセージは、会談やスピーチの場で繰り返し耳にしたものであり、前チャクウェラ政権が「ATM+M（Agriculture, Tourism, and Mining + Manufacturing）戦略」として掲げている国家戦略と一致しています。

平野健太郎およびせいぼじゃぱんは、この貴重な経験を支えてくださったすべての皆様に心より感謝申し上げます。大臣、代表団、大使館スタッフおよび大使、万博主催者、そしてその他すべての関係者の皆様のご協力のおかげで、イベントを成功させることができました。

渡航概要(2025年10月25日～11月6日)

せいぼの学生スタッフである、平野健太郎と吉田怜は、約2週間にわたってマラウイを訪問しました。今回の渡航は、せいぼの学生スタッフによる初の現地訪問であり、今後の継続的な派遣体制を築くための重要な第一歩となりました。今回の渡航では、首都のリロングウェから入国し、翌日、せいぼマリア北部拠点のムジンバ地区に移動しました。その後、南部ブランタイヤ地区に移動し、ブランタイヤより出国。合計10日間の滞在となりました。



今回訪れた都市

渡航目的

- 1) 給食支援の現場と、給食がもたらしている影響を総合的に直接把握すること
- 2) 今後継続的に日本側スタッフが渡航できる体制を整えるための準備を行うこと

首都-リロングウェ

日本大使館の訪問では、担当者の方々と意見交換を行いました。大使館では、マラウイの社会・政治情勢や日本の支援状況、国際機関・民間企業の取り組みなど幅広い情報をご共有いただきました。また、Kumbukaniという人物を訪れる機会がありました。彼女は政府機関であるMITC (マラウイ貿易投資センター)の職員で、関西万博にマラウイから派遣されていた方です。到着日には、彼女の甥と姪が空港まで迎えに来てくださり、久しぶりの再会となりました。



在マラウイ日本国大使館訪問



リロングウェの様子



Kumbukani宅訪問

せいぼマリア

今回の渡航では、ムジンバとブランタイヤにおいて学校給食支援プログラムを実施しているせいぼオフィスを訪問しました。現地で実際にプログラムがどのように実施されているか、学校給食の配給システムなどを直接確認しました。



南部ブランタイヤオフィス



北部ムジンバオフィス



南部ブランタイヤ地区において学校給食の配布、モニタリングを行う際に使用されている車両

学校訪問@北部ムジンバ地区

ムジンバ地区では以下の8つの小学校を訪問しました。

- ・ St Paul's Primary School,
- ・ Kanyerere Primary School,
- ・ Chabere Primary School,
- ・ Mzimba LEA Primary School,
- ・ Kazomba Primary School,
- ・ Matewu Primary School,
- ・ Kabuku Primary School,
- ・ Machelecheta Primary School.

これらの小学校は、都市部から離れた300人規模の学校から1400人規模の大規模な学校まで様々です。



いずれの学校訪問においても、今回の渡航において学生スタッフは、せいぼの学校給食支援プログラムの効果を確認し、また給食の提供も行いました。学校給食支援プログラムの導入により出席者数が約250%上昇した小学校もあり、多くの学校においてせいぼに感謝の言葉が述べられました。給食を食べることで栄養を得ることができるようになった子どもたちは以前よりも効率よく勉強できるようになり、進級試験の合格率もある学校では50%から90%に改善しました。地域のボランティアも調理過程に深く関わり、感謝の意が示されました。ある保護者は「子どもに戻って、この学校給食を自分で食べたい」と語りました。



学校訪問@南部ブランタイヤ地区

ブランタイヤ地区では以下の幼稚園と地域密着型の子どもセンター(CBCC)を訪問しました。Mlambe and Bwemba CBCCs and Twirane, Future leaders and Tikwere nurseries.

ブランタイヤの学校は小規模ものの学校数はムジンバより多く、都心部から離れた山などに位置することが多いため、物資の配送は毎日ではなく少なくとも週1回と限られています。その影響力は依然として大きいものです。実際、訪問中に職員や保護者からせいぼの活動がもたらす影響について伝えられました。Bwemba CBCCで子ども服を寄贈し、子どもたちとその保護者の双方に大きな喜びをもたらしました。多くの学校では休み時間のベルが鳴ると、子どもたちが「おかゆの時間だ!」と叫び、給食が教室に運ばれると拍手が沸き起こっています。



Beehive and Mary Queen of Peace



Beehive は 英国のチャリティ団体 Krizevac Project によって運営されている、ソーシャルエンタープライズで、せいぼマリアは Beehive の一部門として運営されています。今回の渡航で訪問した「Beebikes」、「Beetech」を含む、様々なソーシャルビジネスを展開しています。以前までは多くの部門が同じ場所に所在していましたが、規模拡大に伴ってそれぞれの部門がチロモニ地区、ブランタイヤ市内に点在しています。Beehive によって生み出された利益は、教育キャンパス Mary Queen of Peace Catholic Institute の運営に使用されています。



Mary Queen of Peace Catholic Institute



Mary Queen of Peace（以下MQoP）は、Beehive と Mobal の利益によって Krizevac Project が運営している、ブランタイヤ県チロモニ地区に位置する教育キャンパスです。幼稚園の Mother Teresa Children's Centre、小学校の St. Kizito Catholic Primary School、高校の Carlo Acutis Catholic High School、職業訓練のための専門学校の St. John Paul II Leadership & IT College が配置されています。また、せいぼマリアの南部事務所も同キャンパスに位置しています。

今回の渡航では、MQoPキャンパスに位置する幼稚園、小学校、専門学校を訪れました。

Seibo Mills

滞在最終日、ブランタイヤ市内からチレカ国際空港方面へ向かい、空港を通り越してさらに車で15分ほど進んだ場所にて建設中の Seibo Mills の施設を視察しました。Seibo Mills は、Krizevac Project の新規事業として立ち上げられた、せいぼ MARIA が給食で使用している原料「リクニ・パーラ (Likuni Phala)」を自ら製造するための工場です。

完成・稼働後は、せいぼの給食原料を自団体内で生産できる体制を整えるとともに、余剰分を他団体などへ販売することで、事業の収益化を目指しています。敷地内には工場と倉庫となる2つの大きな建物が並び立っており、今後の事業拡大を予感させるその規模感が非常に印象的でした。



渡航スタッフの言葉

私がせいぼと出会ったのは高校2年生のときで、活動に携わり始めてから今年で6年目になります。大学4年生となった今、念願だったマラウイ現地を訪問し、一つの節目となる経験を得ることができました。

特に、これまでオンラインでつながってきたせいぼ MARIA のスタッフと直接会い、仕事に向き合う姿勢や熱意に触れたことは、大きな刺激となりました。また、学校の現場や子どもたちの日常を実際に見聞きすることで、写真や動画だけでは伝わらない状況を肌で感じることもできました。

今回の私たちの渡航が、今後、せいぼじゃぱんの学生スタッフをはじめとする多くの人にとって、マラウイを訪れるという選択を後押しするきっかけとなれればと願っています。



平野 健太郎

高校時代からせいぼの活動に携わっており、大学進学を機にその関わりを本格化させました。私自身、今回が初めての海外渡航だったため多少の不安もありましたが、現地のスタッフやボランティアの方々からお話を伺う中で、学校給食が子供たちの「学校へ通う動機」そのものになっている現実を肌で感じることができました。今回の渡航で得た貴重な経験と実感を日本での活動に還元し、支援の輪をさらに広げていきたいと考えています。



吉田 怜

今回の渡航は、ご協力いただいたすべての皆さまのおかげで、大変実りある渡航となりました。最後に、この場をお借りして改めて御礼申し上げます。

ー 平野・吉田



年間報告書に記載するため、渡航報告は要約してあります。
詳しいものはQRコードからご確認ください。



表彰実績・掲載記事

表彰

新宿エコワン・グランプリ

環境にやさしい事業者部門奨励賞【2月】

第18回（令和6年度）新宿エコワン・グランプリにて、せいばは奨励賞を頂きました。

せいばは、2024年より新宿区立 環境学習情報センター 新宿区立 区民ギャラリーとして機能している「エコギャラリー新宿」でワークショップを実施してきました。

また、関連イベントである新宿SDGsフェスタでは、多くの方々にコーヒーかすを使ったエコワークショップ、フェアトレードの仕組みを体現し、伝える授業を実施した上で、商品の寄付型販売も続けてきました。



掲載記事

*一部掲載/公開順



Japan Charity Spotlight: Seibo Japan
(Giving Tuesday)



マリウイと学校給食支援の力
(ガリラヤ通信)



マリウイ産コーヒー豆が子どもたちの給食に。せいばじ
ゃぱん代表が考える未来への投資とは
(Greenfield)



Vol.01 学生が動かす国際NPOの最前線
～せいばじゃぱんの挑戦と進化～



きつね珈琲メディア



世界の未来を作る世代のために！給食でマリウイの子
供の教育と食の安定を支える団体
(ハタラクティブ)

最後に

2025年は、せいぼマリアとせいぼじゃぱんの双方にとって、極めて実り多き年となりました。私たちは、この勢いを2026年へとさらに繋げていきたいと考えています。本年は、多くの子どもたちに支援を届け、たくさんの給食を提供し、すべてのプログラムにおいて高い出席率を達成することができました。これらの成果は、2,000万円を超えるご寄付によって実現したものです。

給食プログラムを直接運営する現場スタッフや、管理・運営に携わるメンバーを含む、せいぼマリアのすべての人々の尽力に、心より感謝申し上げます。彼らの献身なくしては、皆様からのご寄付を、栄養価の高い給食や意義ある社会発展へと変えることはできませんでした。同様に、調理を手伝ってくださる方々や、子どもたちを確実に学校へ送り出してくださる保護者の皆様など、地域コミュニティの中でプログラムの実施を支えてくださる方々も不可欠な存在です。私たちの使命を支えるために、日々休むことなく働き続けてくださるすべての方々に、深く感謝いたします。

また、寄付者の皆様も私たちの活動において中心的な役割を担っています。皆様の寛大なお心がなければ、これほどの飛躍的な進歩はあり得ませんでした。マラウイコーヒーをご購入いただくご支援の一つひとつが、子どもたちを貧困から救い出し、彼らが持つ可能性を最大限に発揮できるようにするための、確かな一歩となっています。皆様のご寄付は、数え切れないほど多くの人生に、多大な影響を与え続けています。

最後に、イベントの開催、講演活動、企業パートナーとの連携、そして私たちの活動理念を広めるために日々奔走している、せいぼじゃぱんスタッフのたゆまぬ努力に感謝します。彼らの活動は、支援の輪を広げ、私たちの社会的インパクトを拡大させる上で極めて重要な役割を果たしてきました。

私たちは大きな前進を遂げましたが、目指すゴールまではまだ長い道のりがあることも認識しています。2025年の成果を礎に、すべての脆弱な子どもたちを支援するという目標の達成に向けて、2026年も着実に歩みを進めていく決意です。これまでの旅路を支えてくださったすべての皆様に感謝するとともに、2026年も私たちの活動と共に歩んでいただけることを心より願っております。





各種リンク・SNSはこちら



せいぼ公式キャラクター
「ポーくん」



特定非営利活動法人 聖母

📍 東京都北区赤羽西6-4-12

✉ info@seibojapan.or.jp

🌐 www.seibojapan.or.jp

編著

吉田 怜 (学生スタッフ)

Charlie Cox (Intern)

執筆

平野健太郎 (学生スタッフ)

山田 真人 (理事長・代表)

Victor Mthulo (せいぼマリア)

杉浦真悠子 (学生スタッフ)